

縄文にハマる人々

——人文学の意義——

日時：**2018年11月17日(土)**

定員：**200名**(事前登録制)

場所：立命館大学衣笠キャンパス **JK001** (充光館地階)

人文学が現代社会に深く関わるのがわかります。文学部の学生の皆さんは卒論や就職など自らのキャリア形成を考える機会になるはずです。

第1部 13:00～14:45(入場は正午から)

映画『縄文にハマる人々』上映会

第2部 15:30～16:50

■出演者トークショー

【トークショー出演者】

いとうせいこう氏(作家/クリエイター〈右写真〉)

安芸 早穂子氏(考古復元イメージ制作)

山岡 信貴氏(映画『縄文にハマる人々』監督)

【司会】

矢野健一(立命館大学文学部・教授/縄文研究)



※事前登録されない場合は入場できない場合がございます。

※定員になり次第、登録締切させていただきます。

本学学生以外の皆様の事前登録方法

映画『縄文にハマる人々』のホームページ劇場情報をご確認ください。

<http://www.jomon-hamaru.com/#theaters>

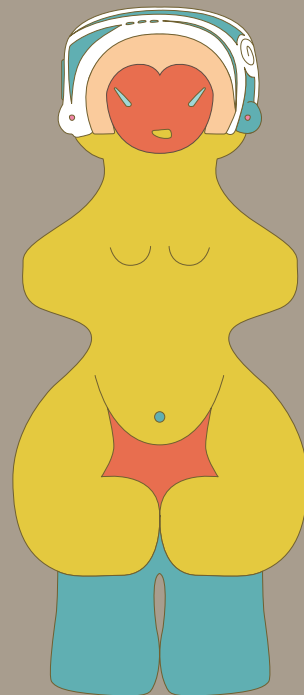
本学学生の皆様の
事前登録は



■映画紹介

縄文時代が終焉を迎えて約2500年。この時間の流れの中で日本人は一体何を失い、忘れてしまったのか。その秘密は21世紀の私たちの根幹を揺さぶり、見慣れた風景を一変させてしまうような、未来へと繋がる新たな世界への扉を開く。

映画では研究者もそうでない人も同じ土器や土偶を見て考え、その考えを語る。なぜ、それを考えてしまうのか、その理由を自ら探す。探している答えは縄文にあるのか、現代にあるのか、自分にあるのか。映画は縄文にハマっている人をはじめ、考古学や民俗学の専門家、さらには文化人やアーティスト、そして縄文に情熱の全てを傾ける人々への取材を経て、人文学研究の根源的意味に迫ってゆく。1000点近く紹介される縄文土器や土偶たちの想像を超えた造形の数々も必見。



■トークショー出演者

いとうせいこう

作家、クリエイターとして、活字・映像・音楽・舞台など、ジャンルを超えて多方面で活躍。代表作として『ノーライフキング』『想像ラジオ』等がある。最新刊は『どんぶらこ』。話題になったレキシの「狩りから稲作へ」では作詞を担当して、衝撃を与えた。



安芸早穂子

考古学研究者とともに縄文時代の復元イメージに取り組む。近年ではアートと考古学の融合プロデュースを展開している。主な作品として、『ユリイカ臨時増刊号 総特集 縄文 JOMON』、『日本考古学辞典』（三省堂）、浅間縄文ミュージアム 壁画などがある。

山岡信貴

1993年に16ミリ初長編映画「PICKLED PUNK」を監督。ベルリン映画祭ほか多数の映画祭に招待上映される。以後も実験的なスタイルを貫きながら定期的に作品を発表し続けつつ、携帯電話キャリアと共に視覚の心理状態への影響の研究やデバイス開発等、サイエンスの分野にも積極的に取り組んでいる。2013年にはロサンゼルスでのIndependent film makers showcaseにて全長編作品のレトロスペクティブが開催された。前作は「死なない子供、荒川修作」(2010年 ハンブルグジャパンフェス招待作品)。

共催:立命館大学文学部／環太平洋文明研究センター／立命館グローバル・イノベーション研究機構
お問い合わせ:立命館大学衣笠リサーチオフィス TEL:075-465-8224

環太平洋文明研究センターのホームページ(<http://www.ritsumeai.ac.jp/research/rcppc/>)では、研究プロジェクト、定例研究会、刊行物、ニュースレターの情報を随時更新しております。ぜひご覧ください。